

「メルツァーの児童分析理論の精髓」

— メラニー・クラインの系譜において※

ヤマガミ精神分析クリニック 山上千鶴子

I はじめに

『精神分析』の歴史において、新しい地平を切り拓いたメラニー・クラインMelanie Klein(1882～1960)の評価は、今や定まった感がある。まずはじめに、そうした彼女の存在が、紛れもなく一つの衝撃として意味したものについて、概説したい。いたいけな^{おさなご}幼子、その無邪気な瞳が曇り、愛くるしげな笑顔が醜く崩れ、頬をつたう涙と耳をつんざくような悲痛な喚き声とが、「なぜにかくも生きることは苦しく辛いのか」という詠嘆を執拗に発している。まさにその‘幼子なるわたし’というものを、我々おとなの日常的な懶惰な意識の意表をついて、内なる忘却の淵から呼び醒まさずにはおかない。それが何よりも、彼女という人の衝撃性である。さらには、その‘幼子なるわたし’の凄惨にして壮烈な破壊性、まさにそれこそが原初的心性の萌芽であり、人間性の深淵にひそむ非合理なるものが、かくも幼子において顕現していることを、彼女は、その激越たる筆致で、活写している。それゆえに、メラニー・クラインは、おそらくフロイトと並んで、後世に永く語り継がれる^{たく}類いの衝撃としてあるのではなかろうか。

そして、『クライン学派』として、その流れを汲む精神分析家おのおのは、その衝撃の^{うっわ}容器としての宿命を担うこととなる。とりわけそうした人々の中でも、ドナルド・メルツァーDonald Meltzer(1922～)は、苛烈にして尖鋭なる容器であろう。この場合の容器とは、すなわち、‘幼子なるわたし’の「なぜにかくも生きることは苦しくも辛いのか」の詠嘆、つまり問い掛けに対峙して、おとな一人ひとりが解決を迫られているとの自覚を持ち、「いかに人は癒されるのか」への返答が要請されるという覚悟を抱える意志を指す。

そもそもメラニー・クラインが人間性の深淵に見た非合理なるもの、人をして震撼させずにはおかない‘凶暴にして陰鬱なる幼子’とは、すなわち彼女その人であったろう。彼女の苦悩にたいする悲劇的な感性には並外れたものがあるが、その背景として、家族を次々と見舞う死の不幸といった個人的事情と並んで、ユダヤ民族の伝統から切り離された同化ユダヤ人の悲哀を看過することはできない。なぜならば、そうした彼女の特殊性が、普遍性へと至る必然的契機としてあったことを、否定はできないのであるから。自分が何者でもなく、居場所がないといった非在の感覚、そうした懊悩を抱えながら、しかも何者かであらんとして焦躁し、八方塞がりの苦渋の極みにおいて出会ったのが『精神分析』であり、それはまさに彼女にとって唯一無比の突破口であった。その後年徐々に展開するに至った精神分析的諸概念と彼女自身の民族的ルーツとの関連性を、彼女は生涯詳らかにすることはなかったし、また彼女の随従者らもそれを殊更に言挙げすることもなかった。しかし、ディアスポラ(離散の民)として、彼女が民族の運命に無頓着でいられたはずもなかろう。むしろその民族性

とも言える流^る瀆^{たく}に自らを重ね合わせ、その共感を牽引力として、‘あるべきところにあるべきわたし’して立ち還る、言うなれば贖^{あがな}い(救済)の道を歩むことを彼女自身の使命としたのではなかろうか。

ちなみに、『クライン精神分析』の基調テーマを敢えて一つ挙げるとするならば、「同胞愛」ということになるが、すなわちそれは、我が心の内において、離散してあるものを、それぞれその本来あるべきところへと帰還せしめようとする倫理的衝迫に由来していると考えられる。このようにその理論は、メラニー・クラインの人となりそして生きざまに深く根ざしながらも、同時に希望と癒しをもたらす普遍的原理を擁し、多くの人々の心に訴え、かつ誘^{いざな}うのである。

II 「汎心的現実」主義的人間観

(1) 概要

「クライン学派」に固有なアイデンティティとは、何であろうか。それはおそらく、汎心的現実主義とも名づけられるべき性格ではなかろうか。人間性の実現fulfilmentにおいて、心的現実psychic realityを第一義的なものとして把えようとする、その徹底した姿勢に著しい特徴がある。その中核的なテーマとは、メルツァーが説くところに拠れば、「精神的安定性 mental stability、自尊心self-esteem、そして満足感satisfaction、それにどのように世界を認知しどういう態度をとるかといった世界観 Weltanschauung までもが、メラニー・クラインが常に何よりもまず強調していたように、小児レベルでの、原初的な良い対象 primal good objectsとの関係性から派生している」ということなのである。

すなわち、我々が生きる糧をそして指針を与えられていのちが鼓舞されるのも、あるいはまた我々が躓^{つまづ}きくじかせられて、いのちが消耗し枯渇するのも、内的世界inner worldの内的対象internal objectsとの関わりのあり様に深く帰因しているということになる。煎じ詰めれば、人間の味わう悲苦の多くは、そうした原初的な良い対象を見失い、迷いかつはぐれたことの結果と言えるのでなかろうか。そしてそれを、いつどこでどう見失ったのか。いかにして取り戻せるのか。そうした心的苦闘が、もしも癒しに繋がるとしたら、それは、己の小児的基盤the infantile basisに突き当たることで、改めて自分が一体何に憧れ、何を慕い、何を希求していたのかを思い出すことによってではなかろうか。

(2) [妄想的・分裂的態勢]から[抑うつ的態勢]への変移

根源的な良い対象との絆への立ち還り、そして失われた内的世界の復興へ向けての心的苦闘、すなわちそれは取りも直さず、「自己の分裂排除された部分の統合をめざし、そして‘母親及び父親のすべての赤ん坊たち’を抱擁しようとする、心的現実における痛ましい苦闘」ということになる。そしてそれこそが、創造的思考ならびに想像力の源泉であると、メルツァーは説く。美術評論家 エドリアン・ストークスAdrian Stokesとの対談で、彼は

次のように語っている。

「芸術に対してのクライニアンのアプローチとは、内的対象internal objects との関わりにおいて、深層にうごめく基本的な幼兒的葛藤に取り組み、かつ徹底操作のための、より組織だった自己治療的 self-therapeuticな営みであると強調されている。その過程での最も建設的な部分とは、内的対象関係を通して、内的世界を強固にし、安定化させ、妄想的・分裂的態勢 paranoid-schizoid position から抑うつ的態勢 depressive position へ向けてのより堅固な通路を拓くことを試みることにある。」

これら2つの態勢は、同時に2つの異なる類いの心的苦痛psychical pain概念を伴う。迫害的不安 persecutory anxieties そして抑うつ的不安depressive anxieties(罪悪感、悔恨など)である。さて、それら2つの態勢が変移するための必要前提とは何だろうか。まずは最初は、断固として己自身の絶対的依存および矮小感を否認するために、慰撫・満足・万能感といった最大の関心ごとにしがみついた自己が挙げられる。そして、それが断念されるかたちで、次第に良い対象(殊に内的対象、とりわけ母親、その乳房ならびに赤ん坊、そして父親との関係)の安全性と自由を保証しようとする‘思い遣りconcern’といった中心課題へと、価値意識が移行するのである。そうした変移の実態を、これから順を追って述べたい。

まず最初にここで、私がタヴィストック・クリニック(The Tavistock Clinic, London)に在籍していた当時、トレーニングの一環として体験した《子どもの遊戯観察》に触れてみたい。メルツァーは、A. ストークスとの対談の中で、「芸術家は、その芸術的制作において、彼の夢を通してと同様に、攻撃と修復のありとあらゆる変容を含みながら、彼の内的対象との関わりの絶え間ない過程を表現している」と述べている。まさにその意味において、子どもたちは、その遊戯空間において、いかに‘小さな芸術家’であることか。《子どもの遊戯観察》こそ、そうした事実初めて私が瞠目させられた、まことに貴重な体験であった。心的現実における苦闘とは、実際いかなるものか、それを例証するために、『児童分析』の実際に言及する前に、ここで3～5才児を持つ母親たちの自主運営の集団保育である《プレー・グループ》での遊戯観察の一端を示したい。

A 迫害的不安－内的対象への攻撃

【プレー・グループ観察記録 A】

(或る日のこと、復活祭の休暇を終えて、プレー・グループの遊戯観察に戻ると、しばらく見ぬ間に、ジャッキーというリーダー格の母親が、出産を間近に控えて、お腹の膨らみが随分と

目立ってきていることに気づく。)

・サイモン： 目ざとく私を見つけて、裸の女の子の人形をぶらさげて近寄って来る。それを私に示し、「あのね、この子、お尻がどうかしてるの。調べなきゃあね。看護婦さんが検査するって」と言う。ほくそ笑みを浮かべ、何やら陰謀めいた気配あり。それを車のハンドルの真上に乗せて、しきりにケタケタ笑いながら呟く。「ここ切るんだよ。ウンチ、ウンチだあ」と、人形の臀部を指差しながら。それから、その車のハンドルをグルグル回転させ始めるのだが、レントゲン撮影してるつもりとのこと。まもなく、毛布を持ってきて、おそらくそれで裸の人形を包むつもりでいたのだろうが、突然悪戯を思いつく。人形ならぬ私に、それを巻き始めた。すると間髪を入れず、周囲にいた何人かの子どもらが、男の子だけでなく女の子もサイモンに加わって、総出で私に襲いかかり、毛布を私のからだに被そうと群がった。あたかも彼ら一人ひとりの攻撃性に火がついたかのように熾烈さを極め、私はほうほうの態で彼らから逃れる。

・ジェームズとウィリアム： ジェームズが粘土をこねて何やら作っており、そこに指をしきりに突っ込み始める。私が何かと尋ねると、「これはおうちなの。入り口が小さいんだ。中にウサギがいるの」ということだった。ところがそうこうしているうちに、状況は一変し、彼がいつも手から離さないで持っていた愛用の小さな模型の自動車をポケットから取り出し、その粘土の塊りの上にそれを押しつける恰好で、暴走させる。グジャグジャに押し潰された粘土の表面にはたくさんの轍わだちの跡がくっきりと残り、いかにも中のウサギは轢き殺されたといった生々しさがあった！ さらにそれから、それを料理用ナイフで切り刻み、ケーキなんだと言いはしたものの、まもなくそれを一塊りにまとめて押し潰したところで、終わりとする。・・・その傍らで、ジェームズと私の会話を耳にし、おそらく一部始終を目撃していたはずのウィリアムがやおら、ハサミを手にして、画用紙から円を切り抜き、さらにはその真ん中に切り込みを入れ、「風船がはじけた！」と宣言する。それから、彼の独白が続く。かろうじて私の耳には、「赤ちゃんが産まれたんだよ」という声が、漏れ聞こえた。

・アニヤ： ウェンディ・ハウスの中で幾人かの子どもらがかいがかいお茶の用意をしていた最中に、アニヤが侵入する。無言のまま、啞然とする彼らを尻目に、テーブルの上の皿などを次から次ぎへと窓から外へ放り投げる。そしてその少し後、やにわに「私なんて、おうちに8人も赤ちゃんがいるんだからね！」と威張った風に宣言し、ガリーが手に人形を持っているのを目ざとく見つけるや、「私のよ！」と彼からそれを奪い、しかも窓からそれを放り投げる。それはよくないと言う私に、彼女はヘラヘラ笑う。そしてこの後、アニヤが机の上でクレヨンで何ごとか描いていたので、私が何かしらと訊く。最初知らんぷりして、まるで「内緒だよ、あんたには言わないよ」というふうであったが、やがてクスクス笑いをしながら、いかにも嘲りを込めて、「手と、それからお尻」と言う。(確かに、自分の手をなぞったものらしい五本指の大きな手と、その傍らに小さな丸が、尻尾をつけた恰好で描かれてあった。) それからしばらくウンコとか何やら一人ブツブツ呟いていたが、もう用はないとばかりに、侮蔑的な物腰で席を立つ。

・ダンとトーマス： 大きな積木を積み上げて、四角いお家を作っている模様。円い戸口を一

角だけ残す。彼らのひそひそ声が漏れ聞こえ、それは罫で、ジョシュアという一番幼い男の子を、その罫に嵌めるという悪企みに熱中しているのであった。彼らは代わる代わるにジョシュアに接近し、彼をおびき寄せようとするが、うまくゆかず、断念せざるを得ない状況となる。後で、私がダンにどういう目論見だったのかを尋ねると、「彼を罫に嵌めたら、拷問するつもりだったの」と、ニタニタ笑いながら、いとも簡単に自白。

・ニール： 絵の具でお絵描きをしている。画用紙いっぱい大きな黄色のガラス窓を描いていたのだが、それを黒の絵の具で一面に横なぐりに塗り潰してしまう。ギョツとして私がどうしたのかと訊くと、「窓を閉めたから。小さな男の子が眠るからなの」と説明し、「ジャッキーはここにいるの」と呟く。そしてふと傍らの私に向かって「ジャッキーは、小さな男の子がいたんだよね？」と訊く。「いいえ、女の子よ。ルーシーと言ったでしょ」と私が返答すると、何やら混乱した面持ちで呆然としている。

よくよく見渡せば、あちらでもこちらでも、子どもらは誰も彼もが、ジャッキーの膨らんだからだに取り憑かれていた。母親の‘内側の赤ん坊 inside babies’に、彼らはいかに脅かされていたことか。そうした内側の赤ん坊への空想的なとらわれからくるもしやの悪い予感が、眼前に現実としてあることの動揺・焦り・怒り。その現実を許しがたいこととして、遮二無二に我が手でくつがえそうと、まさに悪戦苦闘している彼らではないか。それも徒労でしかないのだが、しかし攻撃の手をゆるめることはない。敢然として抗い挑み、ひたすら突き進もうとする。実際には、2、3の例外を除いて、彼らの殆どは、小さな弟妹の誕生に出会っており、それが彼らの外的現実であったのだが。そうした彼らの執拗な自慰的白昼夢は、破壊の爪痕をあちらこちらに残しつつ、セント・ジョン教会の集会場ホールという彼らの遊戯空間をすっぽり覆ってしまっていた。それは、観察者としての私を驚愕させるに十分な凄味を孕んでいたのである。

このように、遊戯観察の具体例において、ジャッキーという母親の‘膨らんだからだ’という外的刺激に触発され、沸騰点にまで高まった迫害的不安に、子どもらはそれぞれどう対応したのかが見てとれる。そこに妄想的・分裂的態勢の生々しい実態が、垣間見られる。己の破壊的部分および破壊的対象を投射するというかたちで、母親のからだに侵入し、かつ内側の赤ん坊の放逐もしくは損傷を企てようとする、内的対象との投影同一視がフルに稼働された自慰空想 masturbation phantasy が蔓延している。それへと駆り立てられる動機としては、メルツァーが指摘するように、分離の耐え難さ、万能感的支配、羨望、占有欲的嫉妬、信頼感の欠如(背信的陰謀)、過剰な迫害不安などが、特徴的なものとして挙げられよう。

B 抑うつ的不安—内的対象の修復

子どもの遊びは、無邪気な暇潰しでしかないものとして、我々おとなは日頃見過ごしがちである。ところが、個々の子どもに焦点を合わせて、彼らの映像ショットの一齣一齣を繋いでみると、意外にも 心the psyche が、或る連続性ならびに固有性を有しながら、それぞれの中に厳然として息づいており、むしろ執拗にあるいは懸命に、その心的苦痛を徹底操作 working-through していることに気づかされ、啞然とする。かくして、心は生きてる！動いている！と言えよう。さて、そうした意味合いで、さらにここに、同じくプレイ・グループで出会った女兒・シモーヌを、一つの例として取りあげてみたい。3歳3カ月から4歳8カ月迄の成長期間に、彼女は、抑うつ的態勢へ向けて、いかなる心的苦闘を経て、どのような心の変遷を辿ったのであろうか。

【プレイ・グループ観察 B】

・シモーヌ：小さい女の子ながらも、弱みを見せまいとしてか、わざと偉そうな態度を取る。自信たっぷりな物腰で、干渉されるのを毛嫌いし、こちらが手を出そうものなら、大変な剣幕で怒鳴る。その一方で、あれしろこれしろと結構命令口調でこき使う。時折親しげな振る舞いをしてきて、こちらもつい油断して手を貸していたりすると、突如として彼女の面相が、憤怒と邪悪さの満ち満ちたものへと豹変し、爪を立て牙をむく。自分より幼い子らに対しても同様で、何かの拍子に、彼らを攻撃の餌食としかねない。猛々しく、いつどう雲行きが怪しくなるやら、恐ろしいの一語に尽きた。シモーヌの母親が、嘆息とともに語ったところでは、「以前はとってもやさしい子だったのに、弟が産まれてから、まるで変わってしまって…。意地悪げで、気分屋で、みじめったらしい風情で、いつも何かしら訳の分からないものをいっぱい抱えているみたいで、実際誰にも見られていないと思うと、何かしらしてはいけないことをしたりする。本当に、あの子の心が読めるものなら、どんなにいいか知れないのだけど…」

そして或る日、私が一週間の休みを経て出掛けると、玄関口で彼女から熱烈な歓迎の抱擁を受け、オヤオヤと思う。ところがしばらく経って、私が庭でサッシャとフラフープで遊んでいた折り、その輪の中に私が捕まったのを目にした途端、すかさずシモーヌは、それを私への敵意と怒りを爆発させる好機としてとらえる。「そいつの尻を、ひっぱたいてやれ！」といきりにサッシャを煽動し、さらには彼女自身が率先して、「おまえは、悪いヤツだあ！」と私を詰りながら、必死の形相で叩きにかかる。愛憎いずれにしてもその過激さには、面食らわせるものがあつた。

母親へのシモーヌの競争意識は、熾烈であつた。母親を父親の真似をして名前と呼ぶことがあるらしい。一度皆と一緒にのお遊戯の時間に、母親を先導するかのよう「ベラ、立ちなさい！」といかにも優位に立つ者の素振りを見せた。彼女の遊びは、レディになって結婚式にゆくとか、ティー・パーティを開いたり、料理をつくって皆に配るとか、人形を乳母車で散歩に連れてゆくとか、現実的な母親の真似ごとに終始していた。気質の激しさは相変わらずな面があつたが、しかし月日を重ねる中でおとなとの交流においては、一緒に何々を

探して欲しいとか、足が濡れたので拭いて欲しいとか、依頼をすることも、かつこちらからの援助を受け入れることも、徐々に容易になっていった。

そして、或る意外な出来事を目撃する。ティー・パーティーを準備していた彼女が、お茶を紅茶茶碗に注いでいた傍らでアニヤも同じようにするのを、邪魔されたと怒り、あんたは入れてやらない！と追い払おうとする。そこにジョーが登場し、アニヤに加担して、逆に、おまえなんかピクニックに入れてやらない！と告げる。しかもあれやこれやままごと道具までも彼らに横盗りされてしまう。「私は入れてもらえないんだあ」と一人悲しげで気落ちしたようすで、ピクニック・パーティの成り行きを傍観し、なす術もなく立ち尽くすシモーヌ。彼らははるかに年下の子どもたちなのだから、報復しない彼女がむしろ奇妙であった。そしてしばらくして、人形の家を覗き、そこに幾らか彼らにまだ奪われていないものがあつたのを目にする。特に彼女は、小さな赤ちゃん人形がいる揺りかごに気を奪われ、「揺りかごが倒れている。赤ん坊が寝ているのに」と呟くや、それを起こし、赤ん坊を毛布でいかにも心を込めた手付きでくるんでやるのだった。自分がいじめに遭い、弱き者としての痛みに触れ、それを自ら認め受容したことが、小さい者(赤ん坊)への抑うつ的思い遣りへと転じたものと推察される。さらにここで注目すべきことは、がぜん彼女の中に、責任意識が喚起されていることである。

そして、これを転機にというべきか、この頃にシモーヌの趣きが一変する。ハリエツタというリーダー格の母親に、座布団をわざわざ持ってきて、それを敷いた椅子に座るように勧めてみたり、他の子らの幼い弟やら妹やらが訪れると、関心を示し、あやしては笑ったと言って喜んだり、必要とあれば何かと手を貸してあげたりと、かいがいしく気遣いを示すようになる。おとなとの交流も、例えば私がコーヒーをつくっていた折り、私から角砂糖を一個せしめるといった‘おねだり’があつたり、「可愛い服ね」と誉めると、「おばあちゃんが買ってくれたの」と大いに自慢するなど、とても扱い良い、落ち着いた、機嫌のいい子になって、おとなは皆一様に安堵の胸を撫でおろしたのである。

そしてさらに或る日のこと、シモーヌは、ニールを伴って、乳母車に2つ人形を入れ、彼に命じて‘電話’を持ってこさせ、準備万端整ったと遠征に出発する。ほどなく、ホールに隣接してる礼拝堂の玄関口付近にちょうど恰好の‘秘密のお家’を見つける。そこで父親役であつたはずのニールは姿を消してしまうのだが、残された母親役の彼女は一人で、その2つの人形(一つは赤ちゃんで、もう一つの方はその子のお姉ちゃんなんだそうだ!)の世話に没頭する。その傍らに2つの‘電話’が置かれてあるというのが、非常に印象的であつた。それは彼女にとって、たとえ心の内に秘密を持つとしても、それで外界(親・おとな)からわけ隔てられ排斥されることを意味せず、常に関わりの中で自分が誰かに抱きとめられているといった安心の証としてあつたように見受けられた。

このような一年3カ月間に亘るプレイ・グループでのシモーヌの変貌ぶりをまとめると、自己統合ならびに内的対象の安定化と言えよう。そして、その変貌の謎を理解する重要な鍵として、抑うつ的態勢についてのメルツァーの次のような陳述は、極めて示唆的で含蓄に

富み、啓蒙的ですからある。

「早期の自我は具象的性格を有するがゆえに、抑うつ的態勢の再統合の過程では、相異なる断片的な自己は互いが同胞としての関係を持つ。かつてはなはだしく排除されていた自己の部分が再現し、それが原初的な良い対象の領域内で統合のために新たに再活用されることは、すでに統合されている自己の部分によって‘新しい赤ん坊’の状況として体験される。統合された自己の全体familyにこの小さな闖入者を受け入れることの抵抗は、弟妹の誕生に特徴的な不安や嫉妬から波及している。しかしこれらの抵抗に拮抗して、良い対象の牽制力（虚弱な子どもには滋養をつけ、凶暴な子どもは宥めるといったふうに、すべての子を養い育てる親なるひとparental figuresの決意）が、均衡を保つ」。

こうした論旨の脈絡において改めて、シモーヌの2つの‘電話’が、メルツアーが言うところの親なるひと、つまり子らを抱えんと結束する‘結合された対象Combined Object’の象徴であり、それこそがまさに、彼女の中に内界の復興（修復）をめざす力を賦活したのだと言えよう。

III 児童分析の実際

(1) 概要

‘分析空間’とは、これ迄に素描した‘遊戯空間’といかなる違いがあり、そこでは何が起こり得るのだろうか。唯一ここで違いを指摘するとすれば、そこには子どもとともに分析家が存在しているという事実であり、そしてメルツアーが提唱する‘トイレ(排泄的) オツパイtoi let-breast’としての分析家の機能が備わっていることである。ここで基本的な問題としてあるのは、心的苦痛の解消・癒しである。耐え難い小児的アイデンティティからの逃避を目的とした過剰な投影同一視、それが自己と対象との境界を粉碎するために、付随的に地理学上(つまり内外、上下、前後)の混乱 geographical confusionを派生させる。その取り扱いが初期の段階での中心課題となる。

「心的苦痛の解消の最も原始的なかたちは、困窮した自己の部分および攻撃された内的対象の迫害的残骸を外界の対象へ排泄し、その復元された対象と自己の癒された部分とを摂り入れることで、為し遂げられる」

と、メルツアーは説く。

分析上の転移において分析家を、外的に‘トイレオツパイ’として繰り返し幾度も経験する中で、小児的アイデンティティの苦痛が和げられてより耐えられるものとなることで、滋養的乳房 feeding-breast への愛着・摂り入れが回復され、心的現実への責任能力(内的対象への思い遣り・償い)が増大する。この過程は、自己統合を伴い、さらなる発達への道が拓かれるのである。

(2) 症例・ハンナ (年齢 7歳6カ月)

(ここに紹介する女兒は、タヴィストックでの私のトレーニング・ケースの一つである。Dr.メルツァーから個人指導 private-supervision を受けており、分析資料の咀嚼・吟味において、彼の理解に負うところが大きく、ここで「児童分析の実際」を例証するのにはふさわしいものとする。))

- ・主訴： 学校での目立った遅れ。動作緩慢、手先が極端に不器用。いつも夢みがち、心がうわの空。学習課題についてゆけない。他の子どもから、よくいじめられる。ただし、物語をつくるなど、想像力は抜群にいい。語彙および読書力は、並以上。
- ・生育歴： 誕生後三日間、体重が十分でないという理由で、保育器で過ごす。授乳は、最初母乳が試みられたが、うまくゆかず、6週間で人工乳に切り替えられる。1歳迄は病院通いが絶えない状況であった。仕事を持つ母親に代わって、彼女の世話をしてくれるおとなたちが頻繁に代わっている。5歳時の入学までに、排泄訓練が完了しておらず、また着衣なり食事なりが、自分ではまるで出来なかった。尿失禁が頻繁。一人っ子。両親は、四十代前半で、ユダヤ系の知識人階層。
- ・印象： 外見は、全体に締まりがなく薄汚れた感じだが、大きな訴えるような眼に強い自己意識なり個性を窺わせるものがあり、将来伸びるだろうといった力の充溢 competence を予感させるものがあつた。歯並びが悪く、舌と顎がうまくかみ合わないような印象で、話し方に遅滞あり(おそらく、指しゃぶりの常習癖が原因だろう)。しかし時折、おとなびた語彙を使う。注意力が逸れやすく、内閉的となる。
- ・治療過程： 分析期間は、一年7カ月。週5回セッションの intensive therapy。

a 分析資料の概略

まず最初に、開始当初から、春休みを挟んで、次ぎの夏休み迄の半年余りの期間治療経過を述べる。

ハンナは、いつもからだどこか心許無げで、実際にプレイ・ルームのあちこち、家具なり私の脚などに頻繁にぶつかる。自分を一つに繋ぎとめるための原初的な心的皮膚 the primal psychic-skin の形成の何らかの障碍を窺わせる。自己統合の脆さとともに、内的世界、つまり内的対象が収められるべき心の内なる空間が絶えず崩壊の危機に晒されているといった印象を受ける。

遊戯の主たるテーマは、死、損傷そして紛失。内的対象の様相は、老いて消耗の著しい母親オツパイに、脱価値化された浮浪者・父親ペニス。どこにも自分をしっかり抱きかかえてくれる誰もいないといったみなし児的焦躁。さらには、善悪の区別が混沌としており、誰に何が起ころうと、わたし責任負いかねます！といったシニシズムが特徴的。糞便＝赤ん坊

や糞便＝父親ペニスといった混同。それらが詰まってる尻 buttocks でしかない母親オッパイ。その結果として、自分を糞便と同一視。そして、落下への悪夢的恐怖。外的対象との間の‘溝’への敵愾心が顕著。セラピストの解釈能力への攻撃(悪態をつくなり、叱責するなど嘲笑的)。その一方で、溝を埋めんとして、躍起になる。セロテープ、のり、糸、あるいは自分の舌なり顎なり唾さえも総動員する。が、いつも無駄だという落胆に落ち着く。

おとな-子どもの逆転劇を試みる。だからこそ放逐(追放)の恐怖はきわめて現実的。[The boat went down the stream,it was the Queen-Hannah going to Noway] という文章を書く。この場合、本来クウィーン・ハンナ号なる船の行き先は、ノルウェー Norway なのだが、彼女の綴りには r が紛失しており、結果的に Noway つまり‘行き先がない’を意味している。そしてお定まりが、迫害者の手に落ちて、牢獄にぶち込まれ、拷問されるといった加虐性被虐性の色濃い悪夢へとハマる。あるいは‘病んだ子ども’として薬で眠らされるといった内容の病院ゲームへの耽溺。並行して、母親の‘内側の子ども’への熾烈な攻撃は続く。猛々しい騒音とともに、股の間で粘土をハサミで切り刻み、糞便製造機械と化す(実は、糞便＝赤ん坊の殺戮)。さらには、吸血鬼・ハンナの登場。壁一面に赤い水を撒き散らす。部屋中が血の海ならぬ水浸し。抑うつ的な怒り。それをなだめんとして、時には救済者キリストの出番があったり、聖歌をも導入。規制(制限)の摂り入れが、反抗心とせめぎあう。そして、ガール・スカウトという新しいアイデンティティへと一歩前進。

やがて4ヶ月ほどたって、一つの転機を迎える。契機は、風疹にかかったことと、もう一つは彼女が飼ってるモルモットに赤ちゃんが3匹産まれたこと。妊婦が風疹に罹ると、胎児は死産するからと、自分が感染経路となることを極度に恐れる。何しろ今や彼女は、モルモットの名づけ親 god-mother であり、動物愛護者 animal-lover を自認する。しかしそれも、時折気まぐれな魔女の猫 witch-catなるハンナが台なしにしかねない。罪障感、そして再び地獄落ちの悪夢。闇の帝王ダーレックのハンナは、「Contact!(接触を!つまり 応答願います!の謂)」と沈鬱な声で無機的に幾度も呼び掛けを繰り返す。

そして間近に夏のお休みを控えて、俄然‘現実’を悟る。「(頭の中で)想うことthinking と(現実を現実として)知ること knowing とは、違うのよね?」と彼女。そして突如、現実志向的となる。アイルランドへの家族旅行に必要なものリスト・アップを作成しようとして、その際にスペリング(語の綴り)に意欲を示す。規則・規律への順応の第一歩。綴りの一字一字が‘赤ん坊’、誰も迷子にならない、誰も順番を乱さない。調和そして秩序の回復へ向けて、ガール・スカウトのハンナは、整理整頓に忙殺される。しかしながら、お休み直前のセッション、その夏の真っ盛りに、冬支度の完全武装で現れた! 厚手のセーターに、厚手のポンチヨ、そして首巻きまでも。そして漫画本とオックスフォード詩歌辞典を小脇に携えて…。口の中でガムを噛んでいる。自給自足体制ということか。そこには涙と濡れたおしめのままで、凍える外に捨て置かれる‘外側の赤ん坊 outside-baby’との同一視が現れている。しかし春休みの際の打ちひしがれた彼女とは、大きな違い。何とか持ち堪えようとする大きな女の子

a competent big girl のハンナがいた。

b 分析過程の概説

分析過程は、主として分離 separation および対象(転移上では分析家)の個性 individuality をめぐる不安に関して、それぞれセッションごと、週ごと、学期ごと、年ごとに、循環性を帯びる。それら徹底操作の様相は、前述の分析資料の素描を通して、わずかなりとも把握されたのではなかろうか。迫害的不安あるいは抑うつ的不安に彩られた遊戯の主要テーマは、往きつ戻りつの展開を繰り返しつつ、徐々に変容してゆく。これ以降一年余りの分析過程における彼女の変化を、次に簡単に概説する。

依存対象(特にここでは母親オッパイ)への万能感的支配を充たす上で、邪魔ものとして攻撃の標的とされるのが、母親オッパイの支配権を有すると見なされた乳首(=父親ペニス)である。その乳首(=父親ペニス)を乳房から取り除くために躍起となる。父親ペニスの特徴であるありとあらゆる規制 regulation への反逆。さらにそれは、愚弄・嘲笑・侮蔑の餌食とされる。しかしその結果、乳房は、乳首のない穴でしかないオッパイとなり、それは尻 buttocks と混同される。そして、より接近可能となったそれへの侵入を狙って、糞便・父親ペニス faecal penis との倒錯的肛門性愛的同一化を助長させる。しかしながら、そこに陣取った‘統治者’としてのハンナの肛門加虐的破壊性の投影同一視のおかげで、彼女の内的世界(=母親のからだの内側 interior)は、悪魔的暴君に牛耳られた悪夢的地底世界と化し、死が圧倒的優勢となる。たとえば、Salvation Army (救世軍)ではなくて、Starvation Army (餓死軍団)といった彼女の空想が、そうした例の一つ。

それら迫害的な内的対象をてっとり早く排泄しようとして、セッションの途中頻りにトイレに駆け込むハンナ。そして父親ペニスとの競合を続けながらも、母親オッパイと父親ペニス(=乳首)の結合(すなわち Combined Object)をめざし、守護者である良き父親ペニスの摂り入れが希求される。(たとえば、母親が疫病で死ぬ。すると天国で、神様がその命を浄め、蘇らせ、再び母親を地上へ戻すといった空想。)それは、母親の‘内側の家族 inside family’の神秘そして謎についての好奇心の深まりとも関連してゆく。(その例の一つは、人と人が手を繋いで輪になっている切り絵に言及し、それがどうして作られるものか、関心を示したこと。)

また、それら内的対象の安寧が図られる。それは内的対象にいのちの空間 life-space を、そしてそれと共にいのちの時間 life-time をも与えることを意味する。規律への順応。おとなと子どもとの分割 deivision の試み。子どもらの一人としての自分を容認し、親にはプライバシーと自由を与え、生き永らわせようとの努力 sparing へ向けて苦闘する。(例、丘の上の家の絵。玄関の扉には呼び鈴があり、室内には暖炉があって、両親と子どもら3人には、それぞれ別々の寝室がある。)同時にそれは、‘外側の子ども’としての生き

残りへの意欲に結びつく。(例、「フィットネス・クラブ」の体操遊戯。)そして、彼女は徐々に外の世界へと興味が開かれてゆき、実際に、ガール・スカウト、バレエ、そして乗馬と、社会生活及び交遊関係へと十分に動機づけられてゆく。

そして、治療終結を目前にした最後の夏休みから戻った日、「夢は、休み中全然見なかった。頭の中が真っ暗だった」と言うので、もしかしてもう私とは会えないと思ったのかな?と尋ねてみると、彼女はそれを否定し、「そんなことはないよ。だって、あなたのこと知ってるもの。自分のこと、あなたと一緒に人だってこと知ってるもの(I know I'm a person with you!)と返答する。さらに私が、じゃあ私も人 person なのかしら?と尋ねると、「そうよ!だから問題なのよ」と考え深げに、幾分沈鬱な表情で答える。しかしながら、この‘一緒に with you’という言葉の意味するところは、とにもかくにも闇の帝王ダーレックである彼女の叫び「Contact!」が、誰かに届き、聞かれるものと信じられてきた証ではなかろうか。かくしてハンナは、彼女の死者の世界 World of the Dead からの生還を果たしたとは言えないか。

しかしなお、その誰かへの想い(愛)はいかに脆く壊れやすいことか。滋養的乳房feeding-breast の摂り入れが増すにつれて、依存的愛およびその豊かさ・良きものへの憧憬を深める過程で羨望、嫉妬、抑うつ的苦痛が喚起されるが、それらに耐えて、なお求め続けられるかどうか、不確実なハンナがいた。そして、想い(愛)を抱えるための心mindとは、どう培われるべきかが課題として残されていて、考える道具 thinking tools への内的欲求に促されて、ジュニア・スクールへの進学に意欲を募らせる。こうして9歳の誕生日を迎えた彼女は、新しい制服に身を包み、両親の表現を借りるならば、至極‘up-to-date年齢相応な’ハンナとなって、分析治療は終了した。

(Dr.メルツァーには、private-supervision を通して、ハンナをよく抱えていただいた。あるいは、ハンナを抱える私自身が彼によく抱えてもらったと言うべきか。おそらくそのいずれでもあったらうと、今は懐かしく思い出される。)

IV 終わりに

本稿は、メルツァーの業績の全貌を網羅することが意図ではもとよりない。メラニー・クラインの系譜において彼の業績の一端を、私の臨床および観察の経験に照応させて、紹介するにとどめた。最後にここで、メルツァーの分析家としての真骨頂とは何かについて記したい。それは、審美的側面 Aesthetic aspectを、精神の機能 mental functioning の悔りがたい特質の一つとして、敢えてこだわろうとする彼の視座にある。

その著書「The Apprehension of Beauty」の中で彼は、「美なるものを味わうとは、その本質において、それが滅び destruction を潜在的に含有するものと知ることである」と、述べている。それを日本流に言い換えるならば、‘もののあわれ’の本質、生きとし生けるものを愛しみ、生きとし生けるものの悲苦を憐む情とは、言えないだろうか。人間の破

壊性、その我執のおぞましさ、しかしそれを凌駕するところの人間の愛しさに肉薄せんとする透徹したまなざしが、そこに見られる。こうして、心の内なる現実を精神分析の場で見据えることを、己の使命として享受した彼がいる。そして彼は、精神分析がいかに彼自身にとって恩恵 privilege であり、途轍もなく良いものであるかという楽天主義的な信念を、人間の心というものへの畏敬の念と共に、我々に伝えている。‘大いなる癒しの人’として、彼を讃えたい。

ここに、クライニアンとしての個人的な感慨を綴ってみたい。私は、タヴィストック・クリニックに在籍していた6年の間(1973～1979)、図らずもDr.メルツァーを領袖とする分析家サークルの面々に、彼個人からも、それぞれ親しく薫陶を受けたことにはなるのだが、『クライン学派』との因縁を己のなかで真に悟るには、帰国後実に十年余りの歳月を要した。それはすなわち、私という個体史の中で己を生き難くしているものが、遡れば、乳幼児期における母親のからだへのとらわれ、そしてその安穩を脅かすものにまつわる執拗な不安感・気掛かりに端を発していることを、時を経るなかで徐々に衝撃をもって深く味わうに至ったということである。無論この間、心理臨床家としてさまざまな人びととの出逢いに励まされ慰められてではあった。しかし、この因縁に列なつてこそ些かなりとも精神的硬直・窮乏をまぬがれ、生きられ得た自分があるとも言える。そしてそれが、心の容器として非力ではあろうが無力でもなからうといったクライニアンとしての私の樂觀を支えているように思われる。

しかしなお、多くの課題は残る。タヴィストックに暇を告げる際、私の胸裡に去来した一つの懐疑があった。それは、「此の地で自分は、いかなる人としてつくられんとしたのか」という問いである。そして今にしてようやく、この歳月を振り返り、‘ユダヤ的知’への馴化を不可避なものとして体験してきたことになるのではないかという自覚に至る。精神分析が世にその普遍性を標榜しようとしていかに躍起になるとしても、その元を辿るならば、ユダヤ民族性(旧約聖書)との血脈は否認できないであろう。E・フロムに拠るところのユダヤ思想の根幹をなすもの、集約すれば「偶像崇拜の禁止」、「近親相姦的紐帯の固着からの解放」、「(個我の)自由・独立への到達」は、我々日本人一般の常識とは鋭い対照をなしている。そして、個としてのわたしや日本人とは何かを我々自らが問う際に、それらユダヤ的知は我々にとって脅威ともなろうし、挑戦ともなろう。

日本社会には、いたるところの群れに、大なり小なりの偶像が厳存し、そこでは近親相姦的絆への許容度の極めて高い、個中心主義とは縁遠い構造がある。ここで言うところの近親相姦的絆の実態とは、いわば「三猿(見ザル・聞かザル・言わザル)」に象徴されているような「見ない-見せない、聞かない-聞かせない、言わない-言わせない」といった相互否認、すなわち無意識的共謀にあると考えられる。そこでは、現象(心的内界のそれ、あるいは人間関係そのもの)を相対化し、対立の超克を図ろうとする弁証法的展開が封じ込められたままであることが、致命的な欠陥である。そして、彼地での私個人の惨憺たる教育分析体

験を振り返るとき、それこそがまさに私自身の内なる死角でもあったと認めざるを得ない。現代の日本人は、「どういう人としてつられていくのか」を自身で問い直すことを不可避免的に求められているのではないか。そうだとすれば、私自身の中の日本人性とクライニアンとして継承したユダヤ人性との弁証法的展開に、その問いへの解答が見出されるのではないかという期待も込めて、果敢にその挑戦を生きてみたいものだという思いで現在はいる。しかし実際の臨床という場は波乱含みであり、心理臨床家としての煩悶はなおしばらく続きそうに思われる。そこで何を得て、何を失ったかは、歳月を経て人それぞれが、己を賭してこそおそらく知り得るであろう。

さて、精神分析運動の趨勢としては、そもそも創始当初の目論見がそうであったように、いよいよ脱ユダヤ化への傾斜を深め、哲学的意匠を凝らすこと益々盛んになりつつあるようである。しかし、それはもしやして衰微の兆しではなからうかとの危惧が私にはある。精神分析とは本来、人が個として己の生を選びとろうとして、まさに己と格闘する倫理的場なのでなかったか。それはすなわち、わたしがどこまではたして己を選択する余地があるのかといった懐疑に衝き動かされた、自由との主体的な取り組みを意味してはいなかったか。知っていながら知らないわたし、知らずにして知ってるわたしというものの謎・不可解さ。知と不知の錯綜した競演。それを根底において操る、頑迷にして巧妙なる無意識の策謀そして詐術。それらを、厳然として「わたしの中に在る心の内なる現実」として、驚きと感動でもって体験することを可能にする実践の場、そうした『精神分析』の‘今・ここ’に出会い直す必要がありはしないか。その意味でも、ここに改めてフロイトーフェレンツィーアブラハムークライナーメルツァーの系譜を辿ることの意義は大きいと信ずる。

なお、ドナルド・メルツァーについての略歴をここに附記する。

ドナルド・メルツァー Donald Meltzer (1922 ~): イェール大学ならびにニューヨーク医科大学卒。セント・ルイスのワシントン大学において、成人および児童の精神医学について研鑽を積む。1954年に渡英し、メラニー・クラインとともに彼の精神分析的理論構築の完成を期す。主として Wilfred Bion、Roger Money-Kyrle、そして Esther Bick との協同研究に従事する。タヴィストック・クリニックならびに英国の the Institute of Psycho-Analysis において、ごく最近迄、トレーニング・アナリストとして指導陣に加わる。彼の妻、Martha Harris とともに、過去10年の間に、イタリー、フランス、ノルウエー、南アメリカなどの地で精力的に講演活動をし、「児童分析」の復活に意義深い貢献を果す。彼の主要著書は、広く世界各地で翻訳されている。(以上は、1984年出版の彼の著書「Dream-Life」の裏表紙に付された紹介記事からの引用である。)

さらに補足すると、メルツァーはその後、the Institute of Psycho-Analysis 及び The British Psycho-Analytical Society のいずれからも脱退している。既存のトレーニング・システムが権威主義的であり、研修生 candidates の自由な向上心そし

て創造性を窒息させるものとして批判し、その改革の提案が他の分析家との亀裂を生み、徐々に協会とは袂を分かつに至った模様である。現在は、オックスフォードの地を拠点として、独自の立場で、彼の支持者グループ共々に、なお旺盛な活動を展開していると聞く。

《参考文献》

- ・Donald Meltzer: Painting and The Inner World " Concerning the Social Basis of Art" (with Adrian Stokes) Tavistock,London 1963
- ・——The Psycho-Analytical Process Clunie Press 1967
- ・——Sexual States of Mind Clunie Press 197
- ・——Explorations in Autism - A Psycho-Analytical Study Clunie Press 1975
- ・——Dream-Life - A Re-examination of the Psycho-analytical Theory and Technique Clunie Press 1984
- ・——Studeis of Extended Metapsychology -Clinical Application of Bion's Ideas Clunie Press 1986
- ・——The Apprehension of Beauty Clunie Press 1989
- ・——The Claustrium -An Investigation of Claustrophobic Phenomena Clunie Press 1992
- ・Phyllis Grosskurth: Melanie Klein - her world and her work Harvard University Press 1987
- ・メラニー・クライン: 「児童分析の記録」 I & II (M.クライン著作集 6&7) 山上千鶴子訳 誠信書房 1987年初版
- ・E・B・スピリウス編: 「メラニー・クライン トゥデイ」 1&2 松木邦裕監訳 岩崎学術出版社 1993年初版
- ・E・フロム: 「ユダヤ教の人間観—旧約聖書を読む」 飯坂良明訳 河出書房新社 1980年初版
- ・G・ショーレム: 「カバラとその象徴的表現」 小岸昭／岡部仁訳 法政大学出版局 1985年初版

※ 出典:「現代のエスプリ」別冊 「精神分析の現在」

編集小此木啓吾・妙木浩之 至文堂 1995